
紅のプリンセス

エビマヨ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紅のプリンセス

【Zコード】

Z9525P

【作者名】

ヒビマヨ

【あらすじ】

世界では、『覚醒病』という病が流行していた。感染者は皮膚が鉄のように硬くなり、爪は刀のような鋭さをもつ。その様が人間の身体を進化させたように見えたため、『覚醒病』と名付けられた。そして、それを狩る使命を与えられた、紅蓮の炎を操る力をもつ

『緋女』。今年、高校生になつたばかりの川崎力オルは、『緋女

橘美姫

と出会つた。

プロローグ（前書き）

はじめまして
本作品は処女作のため、拙い文章です。しかし、読んでいただけ
るならば幸いです。

プロローグ

煌々と燃え盛る炎の熱が肌をチリチリと焼いて痛い。

もつとも、『緋女』の紅蓮の炎が焼くのは『覚醒者』だけで、普通の人を焼くことはないらしい。だからこの痛みは幻痛なのだろう。炎の向こうから人影が近付いてくるのが見えた。炎の発する光が眩しすぎてよく見えないが、髪の長い女であることが分かった。二十歳くらいだろうか。おそらく、この女人人が『緋女』なのだろう。炎の逆光の中でも『緋女』独特の燃えるような紅蓮の髪が、炎の光に負けないくらいに光を放っていた。

女人人は僕の目の前でしゃがむ。視界の端で紅蓮の髪がさらりと震えた。女人人は僕に目線を合わせて言つた。

「ごめんなさい。本当に、ごめんなさい」

炎の逆光で表情が分からぬが、泣いているような気がした。謝るなよ。謝られると何も言えなくなるじゃないか。

僕は、女人の肩越しに炎が消えるのを見た。

黒い煙が濛々と曇り空に向かつて昇る。

僕は女人の人を押し退けて、黒く粉々になつた残骸を拾い上げる。これは、『覚醒者』となつて焼かれて死んだ父の残骸。『緋女』の炎に殺された僕の父。

分かつてゐる。悪いのは父。『覚醒者』となつた父。でも、許せない。どれだけ謝られても、父を殺した『緋女』のことは許せない。

僕は父の残骸を握り潰し、虚空中にばらまいた。

これは僕が八歳のときの出来事である。

1、橘美姫

玄関の扉を開けると、背の低い女の子が立っていた。上田佳奈でうえだかなある。140センチに届かない身長とガラス玉のような大きな瞳からは、とてもじゃないが今日から高校生になつたよつには見えない。どうやら呼び鈴を押そうとしていたらしく、右手人差し指はボタンの前にあつた。

「いきなり開けるな！　びっくりするじゃないか！」

そう言って佳奈は持っていた鞄を僕に叩きつけた。金具の部分がちゅうど当たつたので結構痛かった。

佳奈の家は僕の家の右隣り。晴れた朝の空みたいな青い外壁の家。小、中学校に行く前、いつもこつやつて迎えに来てくれた。だがそれも中学までだと勝手に思つていた。

「急がないと遅刻しちゃうよ」

佳奈は僕の制服の袖をつまみ、一回、軽く引いた。僕は佳奈に促されるがままに足を出す。

佳奈は僕の一、三歩前をリズミカルに歩く。一歩ごとに外に跳ねた短い茶髪が揺れた。

「力オルさ、部活、どこにするか決めた？」

佳奈は僕の方に顔を向けて言った。

「帰宅部」

なんて僕が言つたら、佳奈は少し驚いた顔をした。

「校則で、部活、必ずやらなきゃいけないの知つてるよね？」

いや、知らない。それ本当？

入学当日からいきなり大きな壁にぶちあたつてしまつた。しかし、擬似帰宅部はあると思うのであまり深く考えないことにした。

「佳奈は？　やっぱソフト部？」

佳奈は中学時代、バリバリのソフトボール少女だった。受験勉強

でしばらく間があつたのに、褐色の肌をしている。おそらく、引退

したあとも練習していたのだろう。

「うーん、やつぱりソフトかな。他にできることもないし」佳奈は口元に手を当てて、白い歯をむきだしにして笑って言った。部活か。どこに入るか早めに決めないと。

学校の校門には人垣が出来ていた。生徒だけではない。青い制服の警官や銃で武装した軍人までもがいる。何が起きた？

聞くまでもない。『覚醒者』だ。『覚醒者』が学校に現れたのだ。校舎の窓ガラスが何枚か割られている。これも『覚醒者』の仕業だろう。

窓ガラスは一階と二階のみが割られていたので、『覚醒者』がいるのはおそらく二階だろう。

「きやあっ」

不意の轟音に佳奈が悲鳴を上げた。二階の窓ガラスが弾け飛び、そこから紅蓮の炎が吹き上がっていた。

一分ほど経つて、学校の正面玄関から、人影が現れた。先程の炎のような燃える紅蓮の長い髪。遠くからでも分かる、それと同じ色の大きな双眸。幼いながらも、かわいい部類に入る顔立ち。佳奈と同じ、紺のブレザーとスカート。

コツコツと、ローファーの音を立ててこちらに向かってくる。

彼女に警官と軍人が鋭く敬礼をした。

「お疲れ様です！」

彼女は警官と軍人の声を無視して、

「中のあれ、身元の確認して」

校舎を指さして言った。

「了解」と声を上げて二人は校舎に走つて言った。

この赤髪が『緋女』であり、同じ高校の生徒であることは誰の目にも明確だった。

入学式を済ませた僕らは各自割り振られた教室にいた。

全8クラス編成で、腐れ縁の佳奈とは同じクラスだった。あの、『紺女』も同じクラス。同じ年だったのか。

教室の扉がいきなり開いた。皆の視線がそちらに向いた。170センチほどの身長と、100キロはありそうなまるい体型の肥えた男だ。頭ははげかかっていて、肌は案外白い。

男は教壇に立ち、細い目で教室を舐めるように見渡した。

「俺が、担任の須藤恭三だ。とりあえず、一人ずつ自己紹介でもしてもらおうかな」

須藤先生が言った。

須藤先生は教室を見回し、「じゃあまずお前から」と窓際の最前列の坊主頭を指さした。

坊主頭は待つてましたと言わんばかりに立ち上がり、声高らかに自分の名前を言った。

後ろの黒髪が続いて立ち上がる。そして名前を言つては次の人物が続く。

ときどき、ボケが入つて失笑が生まれる。

僕は、噛むこともなくその使命を終わらせられた。下手にボケを入れる必要はない。

僕が自分の名前を言い終わつて腰を下ろすと同時に後ろの赤髪が立ち上がる。

「……橘美姫」

橘さんは淡々と自分の名前を述べ、腰を下ろし

橘さんの胸ぐらを隣の席の男が掴んだ。

「てめえ、人一人殺しておいて、よくそんな涼しい顔してられんな」

男が橘さんより30センチは高い身長から、突き刺さりそうな視線を浴びせる。

橘さんは口を開かない。ただ、男の目を見ているだけだ。

「お前が殺したのはな、俺の、一個上の、先輩だつたんだ」

男の湿った声。

橘さんは固く結んだ口を僅かに開いた。

「……だから？」

須藤先生が止めに入るより早く、男の拳が橘さんの左頬を吹き飛ばした。橘さんの身体は男の手を離れ、反対側の隣の佳奈にぶつかった。

佳奈が「大丈夫?」と声をかけたが、橘さんは佳奈を一警しただけだった。

橘さんは口を切ったのか、血が出ていた。

男が橘さんの椅子と机を押しのけ、詰め寄る。そして、再び胸ぐらを掴んだ。男は拳を振り上げる。

不意に、誰かが振り上げた男の腕を掴んだ。驚いたことに僕だった。

「てめえ、何してやがる」

僕が聞きたい。何故止めに入ってしまった?

男は鬼の形相をこちらに向ける。

そこで、「まあまあまあ」と言つて須藤先生が間に割つて入ってきた。

男は僕を一警して席に戻った。

橘さんも口元の血を袖で拭つて席につく。

須藤先生は「ではでは次ははまだまだひら」と流れをなんとか戻してくれた。

後に、男の名前が浜田雅浩であることを知った。

今日は入学式とプリント等の配布だけ。それが終わるとみんな散り散りに帰つていった。

「力オル、帰ろー」

鞄を持って近付いてきた佳奈が僕の肩をポンポン叩きながら言つた。

「あ、うん」

僕は曖昧な返事を返した。

佳奈の後ろに付いて教室を出るとき、何気なく後ろを見ると、浜田と橘さんが何か話しているのが見えた。

「カオル？」

少し離れた所で佳奈が怪訝そうな顔で振り向いた。僕の足が無意識のうちに止まっていたみたいだ。

「あ、ごめん」

僕は早足で駆け寄った。

後になつて、すぐに帰るべきではなかつたと後悔した。

次の日の朝、教室に入ると浜田の机に高さ20センチほどのガラスの花瓶が乗せられていた。赤い花が一輪、挿されている。花は詳しきないので何の花かは分からぬが。

僕は一つの視線に気付いた。橘さんだ。

一瞬目が合うと、橘さんは読んでいた本に目を落としてしまつた。僕は駆け寄り、橘さんの肩を掴んで花を手配せしながら言った。

「橘さん、何か、知ってるんじゃないですか？」

何か根拠があつたわけではない。ただ、そんな気がしたのだ。

橘さんは僕を紅蓮の瞳で睨みつけ、肩の僕の手を掴んだ。小さな

口が開く。

「痛い」

「あ、ごめん」

思わず強く掴んでしまつてた。肩から手をすぐに離した。

橘さんはまた本に視線を戻した。

一呼吸して、

「『覚醒』したから燃やした」

橋さんの冷たい声が返ってきた。

横を見ると、佳奈が青白い顔をしていた。僕と同じことを考えたのだろう。

浜田を殴られた腹いせに殺したのではないか、といふ仮説。『緋女』の炎は人を焼くことができるのでは、といふ仮説。

自分の回りの空気が真冬の冷たい空気に変わってしまったような感覺に襲われた。

怖い。

肺に溜まっていた嫌な空気を一気に吐き出す。一旦冷静なるんだ。

『緋女』が人を殺せるって？ そんな馬鹿なこと、あるわけない。

「普通の人も、『緋女』は、燃やせるの？」

佳奈の血の氣のなくなつた唇が微かに開いて音を漏らした。それを聞いてどうする？

『緋女』はまだ佳奈を一瞥しただけで何も答えなかつた。

2、『緋女』

一週間が経つた。

あれから、浜田以外の生徒は一人も死んでいない。

しかし、クラスメイトは『緋女』 橘美姫 を避けるように

なった。それは僕や佳奈も当然例外ではない。

橘さんは、休み時間になるといつも教室を出てどこかに行つて、チャイムが鳴る一分くらい前に帰つてくる。三時間目を終えた今もどこかに行つてしまつた。

「昨日、保健室で見かけたよ」

隣の席の佳奈が言つた。保健室？ どうして？

「知らないよ、そんなの。怪我でもしてるんじゃない？」

僕の質問は適当にあしらわれた。

でも、佳奈の言つことは一理ある。『緋女』だから、『覚醒者』

との戦闘で怪我することもあるだろ？

「気になるなら本人に聞けば？」

佳奈は僕の後ろの空席 橘美姫の席 に視線を向けて言つた。

「いや、そこまでして知りたいとは思わないよ」

下手に機嫌を損ねねばあの世逝きだ。誰が自ら関わるか。

扉の開く音がした。『緋女』が紅い髪を揺らしながら、入ってきた。

入部届けの提出期限が明後日に迫つていたことを放課後帰る直前に思い出した。

うちの高校は、なんらかの部活動に必ず所属しなければならないというくだらない校則があるので、僕もどこかに所属しなければならない。

一番の候補はパソコン部。十数名の幽霊部員がいるらしい。まさに僕の求めていた、擬似帰宅部だ。次点が将棋部。まだよく知らないが、たいした部ではないだろう。

期限ギリギリに提出するのもどうかと思つので、今日の「ひじき」つさと提出してしまいたい。幸い、パソコン部も将棋部も今日が活動日らしいので、誰かしらいるだろう。

パソコン部の活動場所は、四階の一一番西のPCルームだ。早速向かった。十三段の階段を一段ずつ上がる。踊り場のあと、また十三段。

一階、三階、四階まで上がった。

西に伸びる渡り廊下を歩く。四階にある音楽室やら美術室から生徒が談笑する声が聞こえる。

突き当たりを右に曲がるとようやく到着。教室からPCルームまでの道のりが遠いのが、パソコン部の一番の欠点だ。

僕はドアノブに手を掛けようとしたが、扉に貼つてある紙がそれを止めた。

パソコン部は廃部となりました。と書いてある。

は、廃部？

これはさすがに予想外だ。だが、まだ将棋部が残っている。僕は引き返そうとしたとき、一つ不思議なことに気が付いた。

部屋の明かりが扉の磨りガラスからもれてい。廃部になつたのなら、放課後に使用されることはないのではないか。

僕は恐る恐る扉を引く。

広さは教室一部屋分くらい。入口右手にあるホワイトボードに対して垂直に長机が三列並べられており、その上にPCが置かれている。机一列にPC十台が一列、背を向けて対に並べられている。ホワイトボードの前には先生が使うマザーボードコンピュータがある。マザーボードコンピュータの前に紅い髪の女子が座っている。『紺女』の橋美姫だ。

何をしているんだ？

『紺女』関係のデータを整理しているのだろう、と思つた。しかし、それは違つたらしい。

「いやー、と猫のかわいらしい鳴き声が聞こえた。ディスプレイを見る橘さんが笑みを浮かべた。橘さんの笑顔は見たことがない。

猫の動画を見ているのだ、と思つた。

橘さんがこっちを向いた。見ていたのがばれた。

橘さんの顔が朱に染まつた。マウスを動かす。動画を停止したのだろう。

「な、な、なんでここに?..」

それはこっちの台詞だ、とは言えなかつた。

「入部届けを提出しに来たんだけど、廢部になつてたの知らなかつた」

僕は入部届けをひらひらさせながら言つた。

橘さんは椅子から下りると、一目散にこちらに歩いてきた。「秘密。今見たの、全部秘密にして」

橘さんは眉尻を吊り上げて言つた。紅い瞳にはうつすら涙が溜まつてゐる。そんなに恥ずかしいことだったのか。

「分かりました。誰にも言いません」

紅い瞳の迫力に圧されて敬語になつてしまつた。佳奈よりも高い、150センチほどしかないのに『紺女』であるとの圧力はすごい。

絶対だからね、と何度も念を押してきた。言つ氣はないし、別に猫好きがばれてもいいじゃないかと思う。

『紺女』の紅い髪を尻目に部屋を後にした。

入部届けに書いた部活動名に横線を引いて、下に新しく「将棋部」と書き足して将棋部顧問に提出した。顧問の話によると部員が三倍近くに膨れ上がつたらしい。パソコン部員が流れこんできたのだろう。

う。

時刻は17時すぎ。外は赤い空がだいぶ闇に侵食されていた。

僕は玄関で靴を履き替え校舎を後にした。

前庭は校門まで五十メートルほど。アスファルトで舗装された幅三メートルほどの地面。脇のむきだしの土には桜のような樹木が間隔を置いて植えられている。雑草はない。

校門を出たところに、黒い人影がうずくまっているのが見えた。うちの制服の女子。黒くみえたのは壁の影になつているからだと思った。否、違った。

本当に黒いのだ。肌が、爪が。紺の制服もこの時はどす黒い闇色に見えた。瞳だけは紅く、爛々と輝いている。ハー、ハー、と苦しいうな息遣い。両手で両肩を強く握りしめている。

「た、たすけ

息も絶え絶えの掠れた声。意識はまだ残っているが、それも時間の問題だろう。

紅い瞳がこちらを向いた。

背筋がひどくぞつとした。

怖い。殺される。逃げる。逃げる。逃げなきやだめだ。

足を動かそうとした。根を張つたように重くて動かない。

彼女の荒かつた息遣いが聞こえなくなつた。刺すような冷たい風が吹いた。全身が震えた。

彼女が立ち上がつた。さきほどとは様子が違いすぎる。瞳は天を見据え、口は不気味に微笑んでおり、端から涎が流れる。

『覚醒』した。

もうだめだ。逃げられない。

力チカチカチ……。

耳元で何か鳴っている。僕の奥歯だ。手の平は汗でぐっしょり濡れている。足は震えてまともに立つていられない。

僕は膝から崩れ落ちた。アスファルトに手をついてうづくまる。絶望感と恐怖が僕を支配した。涙が止まらない。

走馬灯が見えた気がした。生きた記憶が映像となつて脳を駆け巡る。

僕は顔を上げた。

爛々とさせた瞳を僕に向ける『覚醒者』。

腹に激痛が走つて、身体が宙に浮いた。腹を思い切り蹴られた。

二、三回転げた。

「げほっ、がっ

息が苦しい。まるで鉄パイプで殴られたような痛さだ。

『覚醒者』が爪を振り上げた。

死んだ。と思った。

『覚醒者』が爪を振り下ろす間際、校舎の方から飛んできた紅蓮の光が『覚醒者』を吹き飛ばした。

ああ、そうだった。この学校には、彼女がいるんだった。校舎に視線を向けると、確かに確認できた。紅い髪と瞳。こちらに向かつて歩いてくる『緋女』の姿が。

『緋女』の放った炎弾を受けた『覚醒者』の肩は、爆発で服の袖が引き裂け風に舞い、その中にあつた腕は黒い皮膚一枚でかろうじて繋がっている状態だ。今にも取れてボトッと落ちてしまいそうである。

橋さんは僕を庇うために僕の前に立つている。

「警察に連絡して」

橋さんは『覚醒者』を見据えたまま言つた。

僕は鞄から携帯を取り出し、ボタンを押す。手が震えて押し間違えそうになつた。

携帯を耳に当てるとき警察の無機質な声が聞こえてきた。

僕が状況を説明すると、「分かりました。すぐに向かいます」と言つて切られてしまった。

僕は携帯をポケットにしまった。

不意に爆音が轟いた。橘さんが一発、炎弾を『覚醒者』にぶつけたのだ。

『覚醒者』の右腕は取れて完全になくなってしまった。左腕は炎弾を受けたが焦げ跡がついただけだ。

舞い散る服の破片に紅蓮の炎は点つていない。物を焼くことはないからだ。

『覚醒者』は五メートルほどあいた距離を一気に詰めようと走った。だが、橘さんが飛ばした炎弾五発をもれなく受けて五体のほとんどを吹き飛ばされた。爆風が、あたりを吹きすさぶ。何故か、それはひんやりと冷たかつた。おそらく、人に対して熱をもたないのだろう。

残ったのは頭と胴、右足の膝まで。脇腹も深くえぐれ、焼き焦げている。『覚醒者』はこれだけのダメージを受けてもなお生きている。生命力まで強化されるのだ。

僕は吐き気を堪えるので必死だった。

『覚醒者』は這いつくばりながら橘さんに向かっていく。

橘さんの容赦ない紅蓮の炎が『覚醒者』を覆い、柱となつて天を衝く。

「——ツツ！」

断末魔が耳に痛い。

その断末魔を搔き消すようなサイレンが聞こえてきた。警察がやつてきたのだ。警察はパトカーを校門前に止め、『紺女』に駆け寄り事情を聞きに行く。僕のところにも一人、二十代の若いのが聞きに来た。

家に帰った僕は自室のベッドに横たわってで今日の出来事を反芻していた。

授業を受けた。放課後PCルームで橘さんに会つた。帰り『覚醒者』に出会つた。それを橘さんが焼き殺した。

冷静になつて考えると、『緋女』の炎は物を焼けなかつた。爆風は冷たかつた。

つまり、『緋女』の炎は物を焼けない。爆風を熱く感じないといふことは人も焼けない可能性が高いといふことだ。

では、何故『緋女』を畏れることがある？

僕の希望的観測かもしれない。それでもそれに縋り付きたかつた。僕は深い安堵感とともに夢の世界に落ちた。

3、『覚醒者』

入学式から一週間も経てば、クラスメートはいくつかのグループに分かれて過ごすようになっていた。坊主頭の野球部員らのグループや分厚いレンズの眼鏡をかけた男らのオタクグループなどだ。僕は何故か、『緋女』を研究するインテリ集団に属してしまった。おそらく『緋女』の前の席だからそうなってしまったのだろう。休み時間には頻繁に千葉や山下に声をかけられた。『緋女』の左隣の席の佳奈もたまに巻き込まれている。

メンバーは僕と佳奈を含めて四人。橋さんの席の前に僕、左隣りに佳奈、後ろの席に千葉、その横で突っ立っているのが山下だ。いつも休み時間はこの構図である。

「なあ川崎氏、何か新しい情報はないのか」

黒縁眼鏡で背の高く細身の、この男が千葉卓郎（ちばたくろう）である。たまたま、橋さんの後ろの席という一番監視しやすい席だったので、このグループのリーダー的存在になった。

新しい情報といえば猫好きなことや『覚醒者』から助けられたことがそれに当たる。しかし、むやみにそれを言つのは気が引けた。「いや、特によ」

僕は「申し訳ない」というような表情を無理矢理つくつて言つた。「ふう、川崎氏はもつと意欲的に活動に取り組むべきでありますな」千葉は黒ぶち眼鏡の奥の細い目をさらに細くした。

「山下氏はどうでありますか」

千葉の隣の坊主頭（やまとしたじょもひつ）が山下智弘である。中学時代に空手を習つていたらしく、肩幅が広く胸板が厚い。まさしく体育会系の男だ。

「昨日の昼休み、屋上で飯食つてたぜ」

「そ、それはどんな飯でありますか？」

「アンパンだ。セブンイレブンの」

そんなことを知つてどうするといふだらう、などと思つている

と佳奈が口を挟む。

「そういえば、昨日の体育の体力テストのとき、橘さん、すこしかつたよ」

そこは昼食関係の話じゃないのか。まあどうでもよいが。
何が？ と千葉が食いついた。

「足も速いし、握力も。スポーツ万能って感じ」

佳奈は自分のシャープペンを指先でくるくる時計周りに回しながら言つた。シャープペンが指先から不意にこぼれ、床に落ちて渴いた音を立てた。

『紺女』はあの『覚醒者』と戦つていいのだ。自然と体力がつくのだろう。

「それは、上田氏よりも上、ありますか？」

佳奈が小さく頷く。

「そうでありますか」

佳奈は中学時代、一年生にしてレギュラーを勝ち取ることができたほどの身体能力をもつてるので、それを超えるとなると相当な能力だ。

千葉は相手の話を聞きながら自分の腕時計をちらりと見た。

「そろそろ帰つてくるところであります。山下氏は自席へ戻るであります」

山下は扉側最後列の自分の席へ戻つた。
程なくして、橘さんが帰つてきた。

「川崎氏、尾行するであります」

三限終わりの休み時間、千葉はこんなことを言い出した。

現在、佳奈や山下はいない。橘さんの席を挟んで僕と千葉が自分の席に座っているだけだ。

「なんで僕が」

「川崎氏が職務怠慢過ぎるからであります」

なるほど、納得の理由だ。だが、簡単に引き下がるわけにはいかない。

「尾行なんて、リスクが高すぎる。殺されたらどうするんだ」

『緋女』の炎が人を焼かない可能性が高いことは理解していたが、それでも確定したわけではない。それに千葉らはそのことを知らないはずだ。

「大丈夫であります。橘氏を信じるであります」

なんだその理由は。

「そんな理由で」「では放課後、頑張ってくれであります」

千葉の言葉が僕の言葉を遮った。

結局僕は、押し切られて尾行することになってしまった。

教室の清掃を終えて、橘さんの様子を千葉の席で携帯でメールをしている振りをしながらうかがっていると、トイレの清掃を終えた千葉が僕の肩を軽く叩いた。無言の圧を感じる。

千葉は机の鞄を取つて教室から出ていってしまった。やはり、一人で尾行しなければならないのか。

橘さんの左隣りの席の佳奈の鞄はもうない。清掃が終わればさつきとソフトボール部の練習に向かう。ついでに扉側最後列の山下の鞄もない。

教室の生徒が僕を含め、五、六人くらいになつたところで橘さんが立ち上がり、鞄を持って教室を出た。
少し、間を開けて僕も出る。

廊下に人は殆どいない。一、三人が固まつて談笑しているだけだ。橘さんが突き当たりで左に曲がったのを確認して、距離を詰める。壁の陰に身を隠し、その先の階段を覗き込む。橘さんは階段を下りていて、僕は橘さんの視界に入らないよう慎重に、橘さんのペー

スに合わせて一段ずつ下りる。爪先から沈むように足を床につけ、足音を殺す。

上から橘さんが階段を下りきつてその先の玄関に歩いていくのを確認してから、階段を下りていく。当然、足音は極力殺す。

一段残して玄関に視線をやる。ちょうど橘さんは靴を履きかえたところだ。

橘さんが玄関の扉を押し開くとほぼ同時に玄関に向かつて歩き出す。

見失わないように橘さんに視線を投げながら下駄箱を開き靴を取り出し履きかえる。

外に出ると、橘さんはすでに五十メートルほどさきを歩いていた。僕は脇に植えられた桜の木の幹に身を隠しながらあとを追う。幸い、足元の柔らかい土が足音を最小限に抑えてくれた。

橘さんが校門を出て右に曲がってから距離を詰める。

やつと学校を出られた。携帯の時計を見ると、教室を出でから三分も経っていないことに気づいた。これほどまでに時間の流れが長く感じられたのは初めてだ。

校門の端から顔だけを出して橘さんの様子を窺う。

少し顔を下に向けて俯きながら歩いている。おそらく、携帯電話の画面かなにかを見ながら歩いているのだろう。

僕は、校門の壁に同化でもするかのように肩をこすりつけながらあとをつけた。

右手にコンビニや酒屋、民家を見ながら橘さんは歩く。左手の太い国道を何台もの自動車が通り過ぎる。

赤信号で橘さんは立ち止まつた。僕も五十メートルの距離を置いて立ち止まる。周りに数人の若い男女がいたので、それほど目立たなかつたはずだ。

信号が変わり、青になるとまた、橘さんは歩きだした。

青や赤の屋根をした民家を右手に見ながら、十分ほど歩くと交差点に着いた。信号は赤だ。

橋さんは渡らずに右に曲がった。僕も見失わないよつて早足で追いかけ、右へ曲がった。

「いない。見失ってしまった。」

僕は右にコンビニがあるのに気づいた。セブンイレブンだ。中に入ったのかと思い、セブンイレブンの自動ドアをくぐった。入つてから気がついた。コンビニの外で待っていた方が尾行がばれる可能性が低い。しかし、入つてしまつた手前、すぐ外に出るというのはとりづらい行動だ。

とりあえず、入口左手の雑誌コーナーで週刊誌を立ち読みしながら橋さんがコンビニを出るのを待つことにした。

五ページほど読んだところで橋さんが出ていくのが確認できた。僕は週刊誌を棚に戻し、急いであとを追つてコンビニを出た。左右を見渡し、橋さんがどこへ向かつたかを見る。しかしその必要はなかつた。橋さんはコンビニの「じみ箱に寄り掛かつてこぢらうをただ見ていた。

「さつきから、あとつけてたよね」

「いや、僕も帰り道こっちだから」

僕は咄嗟に嘘をついた。この程度の嘘しか思い付かない僕のボキヤブラリーの少なさを酷く恨んだ。

「嘘。こないだ見かけたとき、帰り道反対だった」

「なんぞそんなの知つてるんだ。」

僕は黙るしかなかつた。

それを見た橋さんはほんの僅かだけ口角を上げた。

「分かりやすい人。尾行とかそういうの、絶対向いてない」

僕は言われて、初めて力マをかけられたことに気がついた。

橋さんは僕の顔を見て、口元に左手を当て肩を揺らしながら笑い声を上げた。そんなにおかしな顔をしていたのだろうか。

「次はもっと上手くやって」

橋さんは、軽くブラブラと左手を振りながら立ち去るために歩を進める。

「ちょっと待つて」

僕は思わず、橘さんの空いていた右手を掴んだ。橘さんは眉根を寄せ、口をへの字に結び「放せ」といわんばかりにこちらに不機嫌そうな顔を向けた。

「こないだ助けてもらつたお礼をさせてほしい」

これが、今の僕に出来る精一杯のアクションだった。

僕らはコンビニを少し進んだところの茶色い外壁のカフェに入った。橘さんは「嫌だ」と言つたが、僕が奢ると言つたら渋々ついて来てくれた。

僕らは入口から見えない、店の隅っここの席に座つた。他の客が好奇の目でこちらを見てくるのがあまりにも堪え難かつたからだ。

僕はメニューに一通り目を通した。とりあえずエスプレッソか。

「決ました?」

僕と同じようにメニューに目を通す橘さんにきいた。

「待つて」

橘さんは一言そう言つと、メニュー見ながら「うーん」と唸つていた。

僕はメニューを読み直したり、店の中を見渡したり、天井を見上げたりしながら退屈な時間を過ごした。

橘さんは十分ほど経つてから店員を呼ぶためのボタンを押した。一分経たないうちに髪の短い若い男の店員がきた。アルバイトだろい。

男の店員は橘さんを見るなり幽霊でも見たような怯えた表情を浮かべたが、それでも職務を全うしようと注文を聞いてきた。

「エスプレッソとチーズケーキ」

橘さんはメニューの文字を指差しながら淡々と答えた。

「僕、エスプレッソで」

橋さんのあとに続いて僕も注文した。一瞬、同じ物を頼むな、みたいな冷たい視線を感じたが気にしない。

店員は僕らに注文の確認をとるとそそくさと立ち去ってしまった。一分ほど、僕らの間に沈黙が流れた。女子高生の、あの芸能人がカツコイイ、みたいな話や食器同士がぶつかり合ひ金屬音がよく聞こえた。

やがて、橋さんが口を開く。

「何か話、あつたんじゃないの？」

なんだか橋さんには心の中が全て読まれているような気がした。

ただ、正直何を話してよいものか見当がついていない。

「『覚醒者』について、詳しく知りたい」

一番無難であろう質問をした。

橋さんは少し考え込んでから、口を開く。

「わたしもあまり詳しくは知らない。ただ知ってる範囲でなら教えてあげる」

正直、「ウザい」とか言われて断られるかと思った。

小さな足音とともにさつきの若い店員が注文した品を持ってきた。

「お待たせしました」

若い店員がいまいちやる気の感じられない低い声で言いつと持つていたソーサーに載ったカップとチーズケーキを丸い机に優しく置いた。

橋さんは右を向いたカップの取っ手を左手で180度向きを変え、それを左手で持つてカップの縁に口を付けた。

「熱つ」

橋さんの肩がビクンと震えた。カップの縁から口を離してソーサーに戻した。そして僕を一睨みした。

橋さんはふう、と小さく息を吐き、僕の目をじっと見つめ、小さな口を開く。

「『覚醒者』は、どうして生まれたと思つ?」

橋さんの質問に僕は答えられない。僕は質問の答えを知らないし、

予想もつかなかつたからだ。せいぜい、ウイルスが突然変異したとかそのぐらいしか思いつかない。

橘さんは黙りこくる僕の目から視線を離さない。橘さんは一度結んだ口をまた、小さく開いて言つ。

「わたしたち『緋女』から生まれた」

僕には意味が分からなかつた。『緋女』から？　あの『覚醒者』が？

「ど、どういうこと」

僕は震える口を開いた。橘さんはただ淡々と、冷静に答える。

「『緋女』の力をもとめた馬鹿が『緋女』の血を研究し改造した結果、『覚醒者』が生まれた。ということ」

橘さんは言い終えて、左手でカツプを取つて少し冷めたエスプレッソに口を付ける。

「といふことは、『覚醒者』は『緋女』より後に生まれたつてことだよね」

わざわざ確かめることではないと思いながらもそれをしてしまつた。

橘さんはチーズケーキの先端の鋭角をフォークで親指大に切り取り、口に運ぶ。甘味を充分に味わつた後で僕の目をじっと見据える。

「あなたの考えていることは少し違う」

ちょっと確かめるために聞き返しただけなのに僕が考えたことが分かるのか。

「『緋女』の炎は『覚醒者』を焼く炎とそれ以外を焼く炎の二種類ある。正確には同族と、それ以外だけど」

僕は、『緋女』の全てを焼く炎は『緋女』の意思で焼いたり焼かなかつたり出来るのではと考えた。どうやら、そこまで使い勝手のよい炎ではないらしい。

「同族以外を焼く炎は、『緋女』の敵を焼くためにある。同族殺しの炎は、『緋女』の犯罪者とかを焼くためで、本来の目的は『覚醒者』を殺すためのものじゃない」

橋さんはさもなんでもないことかのよつて話した。しかし、僕に
とつてそれはなんでもないことではない。

「その気になれば、あなたも焼き殺せる」

そういうことだ。僕に限ったことではないが、常に『緋女』に殺
される危険にさらされている。

「それを、わざわざ僕に教えるために、ついて来てくれたのか」

橋さんは何も答えない。ただ、湯気を顔に浴びながらエスプレッ
ソを口に含む。僕はそれを勝手に無言の肯定と捉えたことにした。
橋さんは何故僕にそんなことを話した?隠していた方が、万が一、
僕やほかの一般の人を殺さなければならない状況になつたとき何倍
も動きやすい。それに、ますます『緋女』を怖がつて誰も近寄らな
くなる。僕だってもう関わりたいとは思わなくなつた。千葉や山下
だつて同じように思うはずだ。

橋さんはいつの間にかチーズケーキを平らげていた。エスプレッ
ソも、空になつていた。

「わたし、用事あるから」

橋さんは僕にそう告げると、立ち上がり足早に立ち去つてしま
つた。

僕は、冷めきったエスプレッソの液面をただ眺めていた。

4、九条香織

山下や千葉に昨日のこと話をすべきか悩んだが、話すこととした。無駄な恐怖心を煽るような真似はしたくなかったからだ。

「つまり、昨日の収穫はゼロでありますか」

雲一つない晴れ渡った青空の下、僕らは一限目の体育の授業にいやいやながら参加していた。

「途中で見つかっちゃつたから仕方ないだろ」

僕は手の平に溢れるくらいの大きさの土色に汚れた球を千葉に投げ返した。球は千葉の黒のグローブに当たつて前に落ちた。千葉はそれを素手で拾つて指先で回転させた。

「言い訳は聞きたくないです」

千葉は振りかぶつて球を思い切り投げ返してきた。しかも、制球が良いはずもないのに、球は僕の頭上の遙か上を通り越した。何メートルも転がる球を追つていると、グラウンドの反対の隅で女子がソフトボールをしているのが視界に入った。女子もソフトボールしてたのか。全然気が付かなかつた。

僕は球足の遅くなつた球を素手で拾い上げ、走つて千葉との距離を詰めてから投げた。

今日はキャッチボールを終えた後、二チームに分かれて試合形式の練習を行うのだそうだ。僕は佳奈に無理矢理ソフトボールの練習に付き合わされることが幾度となくあつたので、それなりにプレイすることには自信がある。とは言え運動部連中（特に野球部）よりは上手くないだろう。

しばらくしてキャッチボールが終わると男たちはそそくさとジャンケンでチーム編成を決める。僕はAチーム、山下や千葉はBチーム。

攻撃順はAチームが先。Bチームはそれに伴い散り散りに守備位置に付く。千葉は山下に「頑張ります」と心のこもつていな

いエールを送り、邪魔にならないように脇のフェンスに身を預け、座る。Bチームは10人であるため、一人余る。体力がかけらも存在しないこの男が控えに残るのは必然だつた。僕もできれば千葉みたいに参加しないでいたかつた。千葉が羨ましい。

僕は千葉の隣に腰を下ろし、遠くで同じように試合をしている女子群を見遣る。ちょうど、佳奈の打席。

佳奈は、残念ながらスポーツ向きした身体ではない。特に身長。明らかに低すぎる。

それでも佳奈は諦めることなく、身長の差を努力で埋めようとした。佳奈の努力は凄まじかつたが、それは身長差によるパワー差を埋めるものではなく、俊敏さや器用さを磨き上げるものだつた。本人もパワー差を埋めることを半ば諦めている。佳奈はレギュラーを張つてたものの、上位打線に入ることは全くなかったらしい。

遠くに、金属バットがボールとぶつかる心地よい音が聞こえた。佳奈が打つたボールは一墨手の頭上をライナー性の当たりで越えて行つた。佳奈が得意とする、見事な流し打ちだ。

遠くの女子ばかりを見ていると、隣の千葉が僕の肩を叩いた。

「守備につかないのですか？」

千葉に言われて、Aチームが攻撃を終えたのに気づいた。

僕は脇に置いていたグローブを嵌めて小走りで、空いていた右翼のポジションに入る。遠くの1番打者を見ると、頭上で派手にバットを振り回すパフォーマンスを見せて左打席に入った。最後にホームラン予告をしてバットを構える。

Aチームの坊主頭の投手がウイングミルで球を放る。それを坊主頭の打者がバットの芯で捉えた。

鋭く振り抜かれたバットは空高く宙を舞つた。打者が格好つけて放り投げたのだ。

打ち抜かれた白球は一直線にライト方向に、つまり僕の方向に飛んできた。

幸い、白球が落ちるよりも早く、落下点に入ることが出来た。よ

かつた。

はるか上空の白球が加速度を失い、位置エネルギーを得て再び加速しながら僕に向かつて落ちてくる。

「あれ」「うわあ」「避けろっ」「危ないっ」「川崎ーっ」何故か他の生徒のざわめきが聞こえてきた。一緒にグラウンドで守る男子や打順を待つ男子、後ろの女子の声も。

そうか、僕がしつかり捕球できるか心配なのか。随分なめられたものだ。実際、そんな運動神経は良くないけど。

僕は落ちてくる白球を捕ろうとグローブを頭上に構えた。

「ゴスツ」と音がした。視界にちかちかして星が無数に舞い散った。視界の端に地面を転々とする白球を見て、頭に直撃したことになりました。気づいた。

僕はふらふらして膝から地面に崩れてしまった。

捕り損ねた？ 違う。僕がボールの打撃を受けたとき、白球はまだ空にいた。ということは、後ろから？

駆け寄つてくる大小の足音を聞きながら、僕の意識は飛んでいつてしまつた。

僕は近くの病院の薄暗いベッドの上で田を覚ました。ボールが当たつた場所が頭だけに、精密検査を余儀なくされたのだ。ということで今日は検査入院だ。

こんこん、と扉を叩く音がした。扉を開けて入つてきたのは、薄暗い病室を煌々と照らす赤い髪と両の瞳。『緋田』の橘美姫だ。

橘さんは僕に近寄つてきて、近くの壁に寄り掛かつた。何しにきたんだ？

橘さんは白い壁を人差し指でかりかり引っ搔きながら、何かいいたげにときどきこちらを見る。

「えーと、何？」

たまらず、じからひから聞いてしまった。

「だからつその、」

橋さんはお腹の前で互い違いに指を組んで解いてみたり、それ
をまた組み直したりした。

橋さんは自分の爪先に視線を落としたまま、桜の花びらみたいな
唇を開いた。

「だからつ謝りにきたのっ」

僕は、橋さんに言われてようやく自分が橋さんの打球を受けて氣
を失つたのだと分かった。

「なんだ、そんなこと」

「そんなこと？ わたしがどんな思いでいつして謝りにきてるのか
……」

だつてまさか謝りにくるとは思わなかつた。避けないほうが悪い、
とか言いそうだし。

「謝りになんてこなればよかつた」

橋さんはそっぽを向いてため息をついた。

「じゃあ、帰るね」

橋さんはぱいぱい、と手を振つて扉から出て行つてしまつた。

僕はベッドに完全に身を預け、脱力した。

天井を見上げる。白。

こんこん、と扉を叩く音が聞こえた。橋さん？ 忘れ物？ いや、
そんなものないか。

扉を開けて入ってきたのは赤い髪ではなかつた。

猫みたいな釣り目が特徴的な女の子。同じ年くらい。知らない人
だ。部屋間違えたんじゃないの？

「今出て行つたの、『緋目』だよね

明るい口調で猫目の女の子は言つた。

「そうですけど……あなたは？」

「あ、うちか？ うちは、九条香織。^{くじょうかおり}かおりんつて呼んでや

誰が呼ぶか！

「ところで、あんた、『緋田』とどんな関係なんや？ 付き合ってんの？」

「つ、付き合ってなんかないですよ」

「なんなんだこの人。いきなり現れて何しにきたんだ？ 本当にこの部屋であってるの？」

「なんかこないだ、『緋田』とおもろそなこと話してたやん」

独特の関西弁と標準語が混じったような話し方で僕に聞く。こないだつて言うと、橘さんをつけてたときか。カフェでの話を聞かれていたのか。

「あんた、どこまで聞いたんや？ どこまで知ってるん？」

九条さんの猫目が細く、鋭くなつた。そこには今までの一片の笑みもない。何故、この人は僕に会いに来た？

「うちはただ、『緋女』について知りたいだけや」

九条さんの猫目と唇が一瞬で極上の笑顔に変わつた。分からぬ、この人は。

僕は様々な可能性を検証してみた。

『緋女』に何か深い恨みをもつてゐる。『緋女』に対して好奇心をもつてゐるだけ。『緋女』となんらかの関係をもつてゐる。例えば、九条さん自身が実は『緋女』だとか。

どれだけ考へても答えはでない。出るはずもない。

「何を『ごちゃごちゃ考へとるんか知らんけど、うちはただ『緋女』と仲良くなりたいだけや」

九条さんが何を考えているのかは分からぬけど、九条さんが求めてゐる答えは『緋女』ではなく、橘美姫、という人間についてといひことは分かつた。そして、それは僕も全く知らないことである。

5、『緋女もどき』

精密検査はなんの問題もなし、といつことで、僕は次の日から学校に登校した。

九条さんは実はこの高校の一年生で、毎日のように昼休みに、大きい弁当箱を持ってやって来た。今日も当然、例外ではない。

僕と九条先輩と橘さんが、橘さんの机を囲むように座っている。佳奈や千葉、山下は用事があるとかで教室を出て行った。

「この髪、染めへんの？」

九条先輩は僕の後ろの席で一人座る橘さんの紅い髪を触りながら聞いた。『緋女』である橘さんにこれだけ気安く話しかける人は九条先輩以外見たこともない。

橘さんは九条先輩の手を無言で払いのけ、メロンパンにかじりつく。

「なんや、教えてくれてもええやん」

九条先輩はメロンパンを頬張る橘さんの両頬を摘んで伸ばしたりした。何やつてんだ。

橘さんも想定外の行動にあたふたしてメロンパンを落としそうになつた。

橘さんは怒つて席を立つて出て行こうとしたけれど、九条先輩が手首を掴んでそれを許さない。

「なあ、せつかく来てんやから逃げんとして」

勇気あるなあこの人。殺されても知らないぞ。

橘さんは紅い瞳で九条先輩を睨み、そのあと横の僕を睨んでから座つた。「で、話戻るけど、髪黒くしようとか思わへんの？」

「染めない。紅い髪は『緋女』の誇りだから」

「目は？ カラー『コンタクト入れへんの？』

「入れない」

橘さんは淡々と答えて、メロンパンを一口かじる。

九条先輩は「『緋女』て誇り高いんやな」と言つて次は『緋女』とは関係ない別の話を切り出す。好きな食べ物、色、動物。僕が、橘さんつて猫好きそうだよね、と口を挟んだら橘さんに思い切り睨まれた。

しばらく、途切れ途切れの会話をして（橘さんで途切れる）、昼休みが終わりに近づくと九条先輩は「楽しかったわ」と言つて立つた。疎らに立つ人を避けながら歩いて、扉のノブに手を掛けた。まさにその時だつた。

扉が吹き飛んだ。九条先輩ごと宙を駆け、窓ガラスを突き破つた。最後に地面に当たつて何かがひしゃげるような音がした。

扉がなくなつた入口に立つているのは、髪を白銀に染めたオールバツクの筋肉質な男。ぎらついた紅い瞳から、その男が『覚醒者』であることは一目で分かつた。

「きやああああ！」

一人の女生徒の悲鳴を皮切りに教室が一気にパニックに陥つた。全員が悲鳴と怒号をあげ、一目散に銀髪の男がいない方の入口に向かう。人を押しのけ、踏み付け、殴りつけて。

「てめえら、つるせえぞ」

銀髪の男がドスのきいた低い声で言った。

パニックの教室が一気に冷えて、音一つなくなつた。

「『緋女』つてのは、ドイツだ？」

男の紅い瞳が教室を横薙ぎにする。

「あれか」

紅い瞳は橘さんをとらえ、突き刺すように見る。

橘さんは眉間に皺を寄せ、睨み返す。背中の後ろに隠した右手にはパチンコ玉ほどのサイズの火の玉が握つた指の隙間から微かに光を放つてゐる。

「全員伏せてッ！」

右手を鋭く振り抜き、握つていた火の玉を発射した。火の玉は光の尾を引いて一瞬で銀髪の男との距離を詰め、炸裂した。耳をつん

ざくような爆発音と目の眩むまばゆい光が教室を一気に包む。

橋さんはさらに「一、二、三」野球ボールほどの火球の追撃を加えた。

火球は着弾して膨れ上がり、銀髪の男を包み上げる。「やつたか

「すげえ」「うおッ」

生徒の悲鳴とも歎声ともとれない声をあげた。

煌々と燃え上がった火の海の中に最初にそれを見つけたのは橋さんだつた。

橋さんは窓ガラスを蹴破つて外に飛び出した。それを追つて何かが音速のごとき速さで火の海から飛び出す。火の粉が微かな光を放ちチラチラと舞つた。

窓ガラスの向こう側で炎が燃え盛り、一瞬で霧散した。

「がはッ」

不気味な打撃音とともに血飛沫が残つてゐる窓ガラスに叩き付けられた。その窓ガラスを橋さんが突き破つて教室に転がる。右腕の上腕の骨が折れている。

パキパキと割れたガラスの破片を鳴らして銀髪の男がいつのまにかそこに立つていた。男は橋さんの胸ぐらを掴み上げ、宙吊りにした。そして腹部を蹴飛ばした。橋さんが机や椅子を薙ぎ倒して吹き飛ぶ。

「……『紺女』は殺す。全て殺す」

銀髪の男のきらついた紅い瞳は、氣を失つた橋さんを射殺すように見定める。

やがて、一步、また一步と歩きだす。

窓際で、ガラスを踏む音がした。男が踏む音でも、ましてや氣を失つた橋さんが踏む訳がない。

僕は窓の方を見て驚愕した。

九条先輩だ。

「なんや、『紺女』つて案外弱いんやな」

九条先輩は額から血を流しながら笑つて言つた。

銀髪は振り向いて九条先輩の存在を確認する。

「なんだ、おま」

九条先輩は銀髪が言い終わる前にその顔面を殴り飛ばした。のけ反つた銀髪は怒りを込めた視線を九条先輩に向ける。

「なんやその目」

九条先輩は田にも留まらぬ速さで銀髪の頭をわしづかみ、床にたたき付けた。

「気にくわへんな」

九条先輩の瞳が紅くぎらついた。

「お前、『緋女もどき』か?」

「さあな、どうやろ」

九条先輩に掴まれた頭は、九条先輩の手から漏れ出た黒い炎に包まれ、爆ぜた。

「さよなら、『覚醒者』」

九条先輩は灰と化した亡きがらを踏み蹴散らして教室を後にした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9525p/>

紅のプリンセス

2011年5月4日00時10分発行